

埋蔵文化財緊急調査事業に係る

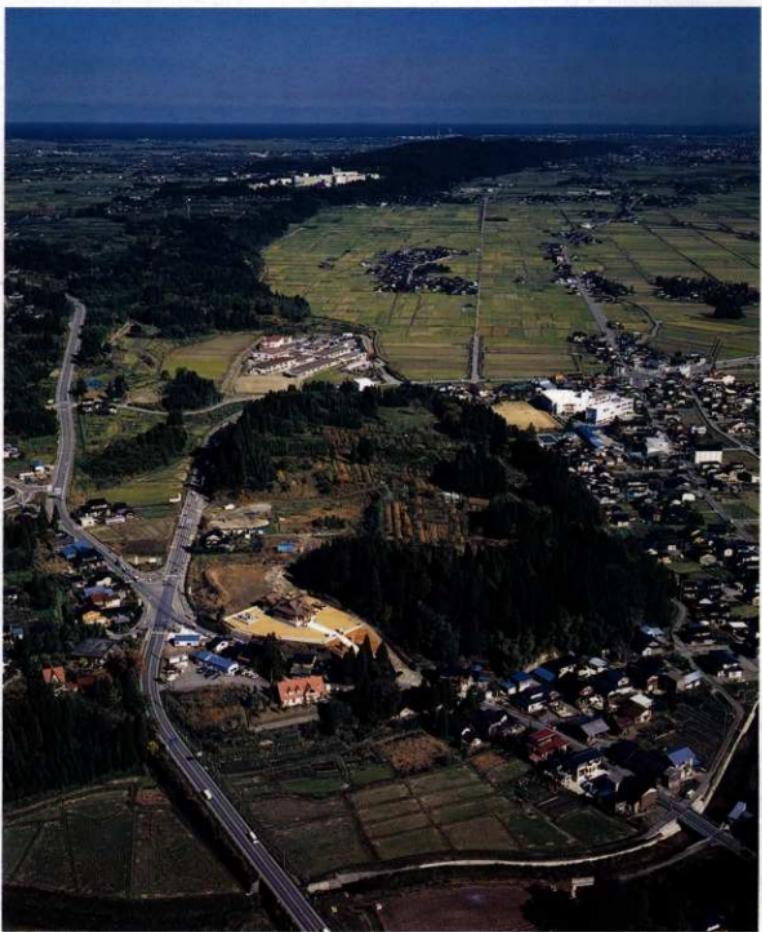
埋蔵文化財調査報告

富山県婦中町

# 千坊山遺跡(2)

1996年3月

富山県婦中町教育委員会



千坊山遺跡全景(南から)

## 序

千坊山遺跡は、婦中町長沢の縁につつまれた独立丘陵上にある、旧石器から中世に至るまでの複合遺跡です。

本遺跡は、平成6年度に遺跡発掘事前総合調査事業に採択され、大規模な試掘調査を実施し、多くの成果を得ました。それに続き、今年度は緊急発掘調査事業によって、「天児六郎屋敷跡」との伝承の残る地へと試掘調査を進めることとなりました。調査では、大規模な土木工事により造られたと考えられる中世の城館跡が確認され、本遺跡の新たなる一面が分かりました。

付近には国指定史跡の王塚や県指定史跡の勅使塚、また現在に残る各願寺などの多くの文化遺産があり、この地、長沢が遠い過去の時代より繁栄したことが窺えます。この地区一帯のこういった歴史を知る上からも、千坊山遺跡は重要な遺跡といえるでしょう。

ここに平成7年度千坊山遺跡試掘調査報告として『千坊山遺跡(2)』を作成し、今後の調査研究を進めるための参考として頂ければ幸いと思います。

最後に調査に対して、ご協力頂きました地域の皆様、関係機関の皆様に心から感謝いたしますとともに、今後のさらなるご援助をお願い申しあげます。

平成8年3月

婦中町教育委員会  
教育長 清水信義

## 例　　言

1 本書は、富山県婦中町長沢・新町・羽根地内に所在する千坊山遺跡の埋蔵文化財調査報告である。

2 事業は、「緊急発掘調査事業」によって実施した。

現地調査・遺物整理にあたっては、富山県埋蔵文化財センターからの職員の派遣を受けた。

3 調査期間・面積は次のとおりである。

調査期間　平成7年10月1日～同年11月26日（実働38日）

調査対象面積　約7,000m<sup>2</sup>

発掘面積　約1,421m<sup>2</sup>

4 調査体制は以下のとおりである。

調査委員会	日本考古学協会会員		西井龍儀
富山県埋蔵文化財センター	所　　長	桃野真晃	
婦中町文化財保護審議委員会		塙　照夫	
婦中町史編纂委員会		久保尚文	
古里地区自治振興会	会　　長	奥山　明	
古里公民館	館　　長	沢村栄義	
婦中町教育委員会	教　　育　　長	清水信義	
調査担当者　婦中町教育委員会	生涯学習課	文化財保護主事	片岡英子
調査員　富山県埋蔵文化財センター	調　　査　　課	主任文化財保護主事	神保孝造
同	同	主任文化財保護主事	橋本正春
同	同	文化財保護主事	高梨清志
調査事務局　婦中町教育委員会	生涯学習課	課　　長	平井光雄
同	同	文化振興係長	見波重尋

なお、作業員・仮設事務所敷地・駐車場の確保については、婦中町シルバーパートナーズ・射水建設興業(株)・(株)ソガ林業の協力を得た。

5 資料の整理、本書の編集と執筆は、調査担当者が当たった。

6 調査期間中および資料整理期間中、次の方々から御教示・御協力を頂いた。記して謝意を表したい。(敬称略五十音順)

宇野隆大・大野淳也・狩野睦・島田美佐子・高梨清志・宮田進一・堀内大介

7 本書の挿図・写真図版の表示は次のとおりである。

方位は真北、水平基準は海拔高である。

遺構の表示は次の記号を用いた。溝：SD

8 出土品および記録資料は、婦中町教育委員会が保管している。

9 発掘調査・整理参加者は次のとおりである。

生田寿美子・中坪千春(整理作業員)

中林隆典(調査作業員)

大平奈央子・堀内大介・海道雅子・野水晃子・景山和也・山崎雅恵・田中慎太郎・滝沢匡・佐藤慎・須田雅昭・

戸鍛錆宏・本村徹・小林香織・藤田良子・近藤美紀(調査・整理補助員)

## 本文目次

序文	IV 調査の概要	6
例言	1 概況	6
目次	2 層序	6
I 遺跡の環境	3 遺構	6
II 調査に至る経緯	4 遺物	17
III 調査の経過と方法	Vまとめ	21
1 調査の経過	1 平成7年度調査結果について	21
2 分布調査	2 千坊山遺跡について	22
3 座標軸の設定	参考文献	
	写真図版	

## 挿図目次

第1図 周辺の遺跡分布図	第9図 石積み立面図
第2図 分布調査結果	第10図 遺構配置推定図
第3図 地形及び区割図	第11図 中世土器分類図
第4図 地区割図	第12図 遺物実測図
第5図 平面図及び横断・縦断面図	第13図 遺物実測図
第6図 土層断面図 T1～T3	第14図 千坊山遺跡概要図
第7図 土層断面図 T4～T8	第1表 周辺の遺跡一覧
第8図 土層断面図 T9～T18	

# I 遺跡の立地と歴史的環境

姫中町は富山県の中央部にあり、北側は富山市と接する。町の地形は、おおむね西側の丘陵部と東側の平野部に二分される。丘陵部は県中央部に南北に連なる吳羽丘陵から射水丘陵を経て、南の牛岳へと連なっている。一方、平野部は神通川とその支流である井田川が形成した扇状地が広がり、富山平野へと続いている。本書で報告する千坊山遺跡は、富山県姫負郡姫中町長沢に所在する。旧石器から中世に至るまでの複合遺跡で、面積は約14.4haである。遺跡は、井田川・山田川左岸にのびる河岸段丘の最南端の独立丘陵全体を範囲としている。遺跡の現況は畠・林・墓地・荒れ地・グランド等で、南西部は土砂採集によって削平されている。この一帯には県道八尾・小杉線に沿って集落が形成され、古くから栄えている。

吳羽丘陵沿いには、旧石器時代から中世に至る各時代の遺跡が数多く存在し、県下でも有数の遺跡の密集地帯となっている。千坊山遺跡はその延長線上に位置する。周辺の遺跡としては、まず、遺跡西方に国指定史跡の王塚古墳と県指定史跡の勅使塚古墳がある。どちらも古墳時代初期の前方後方墳で、勅使塚古墳は県下最大級の古墳としても知られている。この地域にはその他にも古墳が集中して築かれている。弥生時代の遺跡には、南側の丘陵にある富崎1号墓（四隅突出壙墳丘墓）、南方の平野にある富崎遺跡・高日附遺跡・南部I遺跡がある。

中世になると、付近には山城が多く築かれる。中でも特筆すべきものに、南側の丘陵先端部の富崎城跡がある。富崎城は戦国期における越中二大勢力の一つである神保氏の拠点の一つで、それを中心に構成される富崎城群は県内屈指の規模を誇るという。なお、東方の平野は未踏査の為、空白地帯になっている。その他、遺跡の250m北西には各願寺がある。本寺は大宝元年（701年）に創建され、丘陵地帯の仏教文化の中心をなしてきたと伝えられている。また、遺跡南西には蓮華寺遺跡があり、中世にこの地に存在した「蓮華寺」の跡とも考えられている。長沢・富崎周辺は中世には姫負郡における政治の中心となり得る地域だったと考えられる。

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	千坊山遺跡	遺跡：散布地	平安・中世・近世	27	鏡坂Ⅲ遺跡	集落	純文（中世）
2	向野塚	塚	明	28	鏡坂Ⅰ遺跡	集落	純文
3	六治古塚	塚	不	29	鏡坂Ⅱ遺跡	散布地	中世
4	古里保養園遺跡	散布地	純文・弥生	30	古宮塚	塚	不
5	各願寺前遺跡	散布地・寺院	純文・奈良・平安・中世	31	蓮花寺遺跡	寺院	中世
6	五つ塚古墳	古墳	古	32	外輪野Ⅰ遺跡	散布地	中世
7	勅使塚古墳	古墳	古	33	喜崎城跡	西漢山古墳	純文・弥生・中世
8	王塚古墳	古墳	古	34	富崎南西遺跡	散布地	純文
9	王塚古墳北遺跡	散布地	純文	35	富崎南野遺跡	散布地	純文・奈良・平安・中世
10	新町復穴古墳	古墳	古	36	難山寺	散布地・山城	中世
11	新町Ⅱ遺跡	集落	笠置・笠置・平安	37	富崎赤坂遺跡	散布地	弥生・中世
12	新町大塚古墳	古墳	古	38	富崎崎遺跡	散布地	奈良・近世
13	添ノ山古墳群	古墳	古	39	富崎千里古墳群	古墳	古
14	新町田遺跡	散布地	古墳・奈良・平安	40	下瀬岩山	城	中世
15	新町Ⅰ遺跡	散布地	奈良・平安	41	赤坂	山城	中世
16	二本復穴遺跡	散布地	純文・奈良・近世	42	森田山	山城	中世
17	宮ノ高B遺跡	散布地	純文	43	鳩割	山城	中世
18	宮ノ高A遺跡	散布地	純文	44	大船城跡	城館	中世
19	小浜沢古墳群	古墳	古	45	千里C遺跡	散布地	古墳・古代
20	平岡遺跡	散布地	純文	46	千里B遺跡	散布地	古代・中世・近世
21	小長沢Ⅰ遺跡	散布地	奈良・平安	47	千里D遺跡	散布地	古墳・古代・中世・近世
22	小長沢北塚	塚	不	48	千里E遺跡	散布地	古代・中世・近世
23	緑野Ⅱ遺跡	散布地	純文	49	小倉中福Ⅱ遺跡	集落	中世
24	青谷城跡	城	中世	50	南源Ⅰ遺跡	散布地	奈良・古代
25	家老塚散布地	山城	中世	51	高日附遺跡	散布地	奈良・生
26	長沢城跡	山城	中世	52	上吉川Ⅰ遺跡	散布地	古代・中世・近世

表1 周辺の遺跡一覧



第1図 周辺の遺跡分布図 (1/20,000)

## II 調査に至る経緯

千坊山遺跡は、現在までに3回の試掘調査が行われている。

この遺跡は古くから遺物が散布する事が知られていたが、昭和49年に長沢バイパス工事に先立ち初めての試掘調査を行った。この結果、弥生時代末の堅穴住居跡が4棟確認された。また、弥生土器が丘陵全域にわたり散布しており、他に多数の遺構が存在するものと予想された。遺跡付近には古墳時代初期の王塚・勅使塚古墳が存在することから、それらに隣接する集落として注目されることとなり、遺跡の重要性をかんがみて、道路は路線変更されることになった。

平成5年度には、遺跡南西端で長沢稲荷社建て替え工事に先立つ試掘調査を行ったが、明治時代の旧境内造成時に既に地山まで削平されていたと考えられ、遺構は確認されなかった。

平成6年度には、遺跡発掘事前総合調査事業による調査で弥生時代の堅穴住居跡25棟と中世の塹状遺構を確認した。弥生時代の堅穴住居跡群については、これだけまとまった数で発見されたのは県内で初めての例であった。住居跡からは、月影I・II式に比定できる弥生時代末の土器が出土した。付近には古墳が多く存在することから、後の時代にそれらを造りだした集落の前身である可能性も考えられた。一方、中世の塹状遺構については、方形のマウンドの周囲に2重の周溝を巡らせ、その規模は一辺25mにも及ぶことが判明した。築造年代は、周溝より出土した土器から13世紀後半～14世紀前半と推定される。埋葬施設等は確認されず、性格は判然としない。しかし、こういった形態の塹・墓は北陸では稀であり、このような特殊なものを造るべく背景がこの地にあったものと推定された。なお、試掘調査にあわせて実施した丘陵全域の地形観察によって、丘陵南端部に一部で積み石を施すいくつかの平坦面と、堀・土塁と思われる人為的な地形が確認され、城館跡と推定された。平成6年度の調査の成果から当遺跡の重要性は再認識され、継続した調査が必要と判断された。

そして今年度の埋蔵文化財緊急調査事業では、前年度確認された城館跡推定地区を試掘調査し、遺構・遺物の状態を調べた。

## III 調査の経過と方法

### 1 調査の経過

掘削作業に先立ち、調査対象地区全城の草刈りを行った。一帯には枯れ木や落ち葉がかなりの厚さで堆積していた為、草刈りに並行してそれらの除去作業も行い、地形の起伏が分かり易いようにした。

その後、幅約3mのトレンチを17本掘削した。トレンチは平坦面や堀・土塁の向きに直交するように設定した。掘削方法については、調査区が林の中にあり立木が障害になることと平坦面を傷つけないように、重機ではなく人力で行った。また、木の伐採は基本的に行わないこととし、トレンチにかかる立木については傷めないように注意して残した。掘削は地表面までだが、盛土が施されている場合は盛土上面で止め、堆積状況はトレンチの壁際に幅約70cmのサブトレンチを入れて確認した。サブトレンチの位置は、立木の位置によって左右されている。また、時間がかなり制約されていた為、堀・土塁の土の堆積状況については一部でしか確認できなかった。

調査を推進するにあたり、昨年度に続き千坊山遺跡発掘調査委員会を組織した。委員の構成は学識経験者・関係行政機関の代表者・地元住民の代表者から成る。委員会の召集は調査前と調査後の2回実施した。調査前には、今年度調査対象地区的概況と具体的調査方法についての検討を現地視察を交えて行った。調査終了後は、調査結果の報告にあわせ、遺構検出状況を現地で確認し、今年度調査した城館跡についての検討や千坊山遺跡全体の捉え方や今後の対

応について検討した。

調査終了時に合わせて、地元住民を対象とする現地見学会を実施した。昨年度の調査により地元住民の関心が高まっていたり、雨の中を60名を越える人々が集まった。

トレンチの埋め戻しについては、盛土・埋土が予想以上に厚く堆土が多量になった為、やむを得ず小型の重機を使用した。重機は軽量でゴム製キャタピラのものにし、平坦面への負担を最小限に留めるよう順路等にも配慮した。

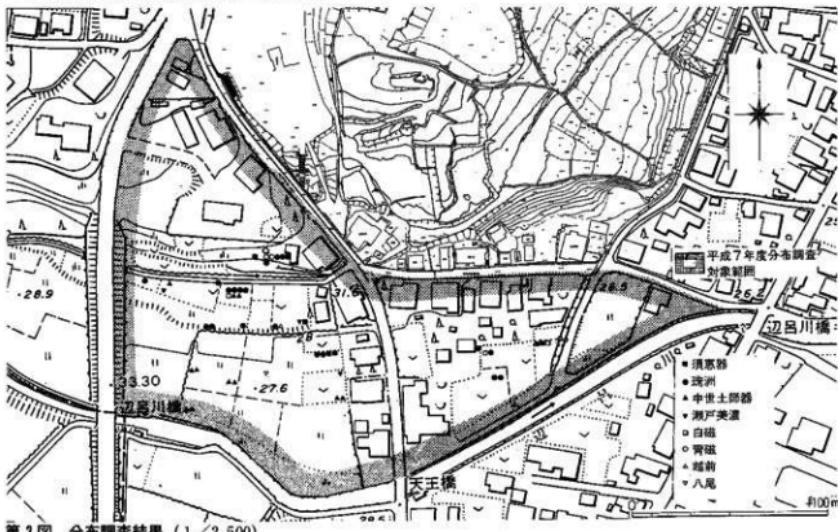
## 2 分布調査

調査期間中に千坊山遺跡の範囲を推定する為、丘陵南側の裾部から辺呂川までの範囲で分布調査を行った。当地区は現在、田・畑・宅地になっている。一帯の標高は27.50~40.00mである。中央部から北側に向かって急な登り斜面になっており、その標高差は13.50mを測る。

調査の結果、丘陵裾部を中心に古代～中世の遺物が採集された。採集された遺物は、須恵器、珠洲焼、中世土師器、瀬戸美濃焼、越前焼、八尾焼、白磁、青磁などで、中世の遺物が多くを占める。採集した47破片中おもな遺物の割合は、須恵器13%、珠洲焼43%、中世土師器23%、輸入陶磁器11%となる。中世の遺物については、口縁部破片より考えると、珠洲焼はⅢ期に比定できる。また中世土師器は非クロロ調整で、後で記述する城館跡出土の土師器分類のB 8類、B 9類にあたる。時期的には13世紀後半～15世紀前半のものと考えられる。この地区で採集された遺物は、珠洲焼を中心に越前焼、八尾焼などの貯蔵用具・調理具の割合が多く、青磁、白磁といった輸入製品も採集されている点が城館跡とは異なる特徴である。

千坊山遺跡の位置する丘陵は、西側は国道359号線沿いに、南側は辺呂川沿いにそれぞれ谷地形になっており、丘陵はそれらに囲まれるように形成されている。現在の丘陵は宅地などによって削平を受けているが、当時の丘陵の範囲は現在よりも広く、南西側の標高の高くなる部分までのびていた可能性がある。

以上のような遺物の採集状況と地形から考えると、遺跡の範囲は分布調査対象地区を取り込むものと推定される。この結果、遺跡の面積は2.4ha増え、14.4haとなった。



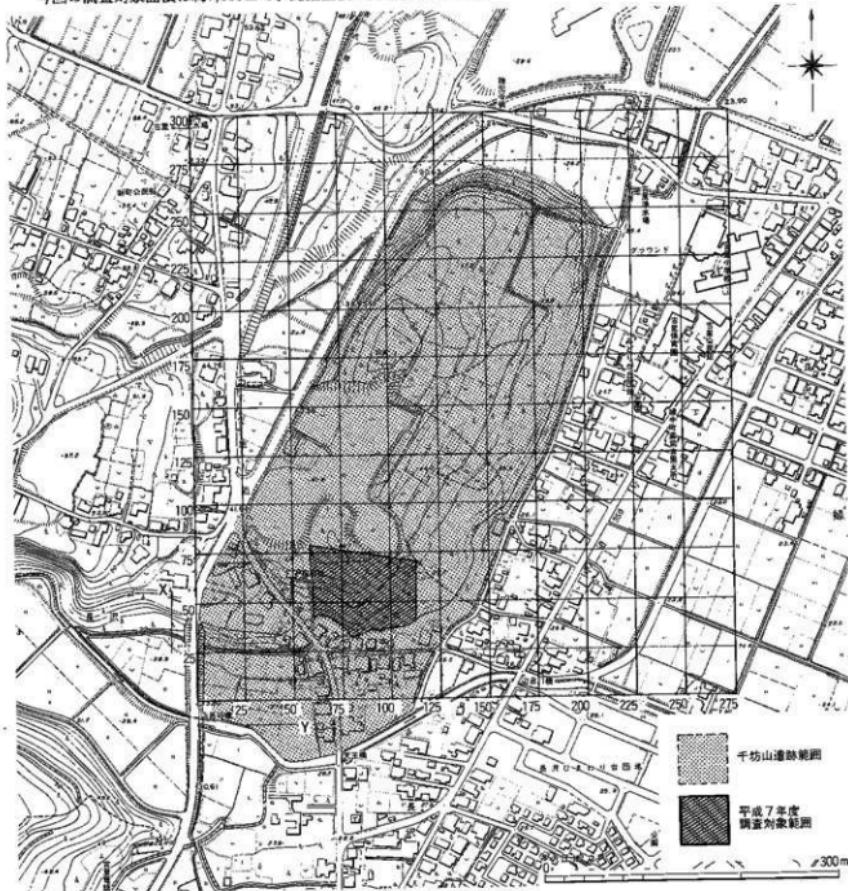
第2図 分布調査結果 (1/2,500)

### 3 座標軸の設定

座標軸は昨年度と同様で、国土地理院設定の公共座標第7系のうち  $X = 72.00\text{km}$  •  $Y = -3.64\text{km}$  の点を原点として設定した。南北軸をX軸とし、 $X = 0$  から北方向に進むにつれて、X座標の数値が増える。同様に、東西軸をY軸とし、 $Y = 0$  から東方向に進むにつれてY座標の数値が増える。1グリッドの区画は  $2 \times 2\text{m}$  の単位とし、今年度の調査区の範囲は、 $X = 35 \sim 80$ 、 $Y = 60 \sim 110$  となる。

地区割りは報告書作成段階で便宜的に行ったもので、アルファベットでA～Kまでの11地区を設定した。地区割り方法は、基本的に平坦面別に分けている。なお、この地区割りは昨年度のものとは別のものであり、今年度の調査区域は昨年度の地区割りではH地区に該当する。

今回の調査対象面積は約7,000m<sup>2</sup>で、発掘面積は約1,421m<sup>2</sup>となる。



第3図 地形及び区割図 (1/5,000)

## IV 調査の概要

### 1 概況

調査対象区は丘陵南端にあり、南側の平野に緩くせり出すあたりに位置している。現況は竹・杉・雜木などの林になっており、薙蓋として見通しが悪い。一帯の標高は38.00~46.50mを測り、各地区的標高は高いものから順にF、I、J、A、C、B、E、H、D、Kとなる。

調査対象区の北側は昭和45年頃の土砂採集によって大きく削平されている。地元住民によると、削平される以前の地形は、丘陵の西側寄りに長軸に平行するようにして尾根の稜線が通っていたようである。丘陵の南側・西側も宅地や神社によって削平されている。

参考として、長沢の旧家・若林家には「天正年間、長沢各願寺繪図」と銘打たれた図が伝わる。その中に千坊山遺跡の位置する丘陵が描かれており、調査対象区のあたりには「天兒六郎元城カコイ内」という註記が見受けられる。この時代、地元にはこの場所が長沢の地を開いた人物にまつわる屋敷跡であるとの伝承があったようだ。一方、地籍図によると、この地区の小字は天王となっている。その名は昔、この場所に牛頭（ゴズ）天王を祀る八坂神社（別名天王社）があったことに由来するといわれている。

### 2 層序

一帯の基本的層位は、上から順にA層：黒褐色シルト（表土）、B層：黒褐色シルト（弥生時代旧表土）、C層：褐色粘質土（漸移層）、D層：黄褐色粘質土、一部疊混（地山）となっている。中世以降の整地により、B~D層は削平を受けたり、上に盛上されたりしている。

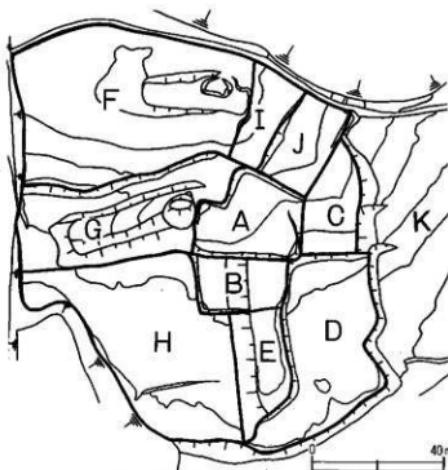
### 3 遺構

調査によって確認した主な遺構は、堀・土塁・溝である。

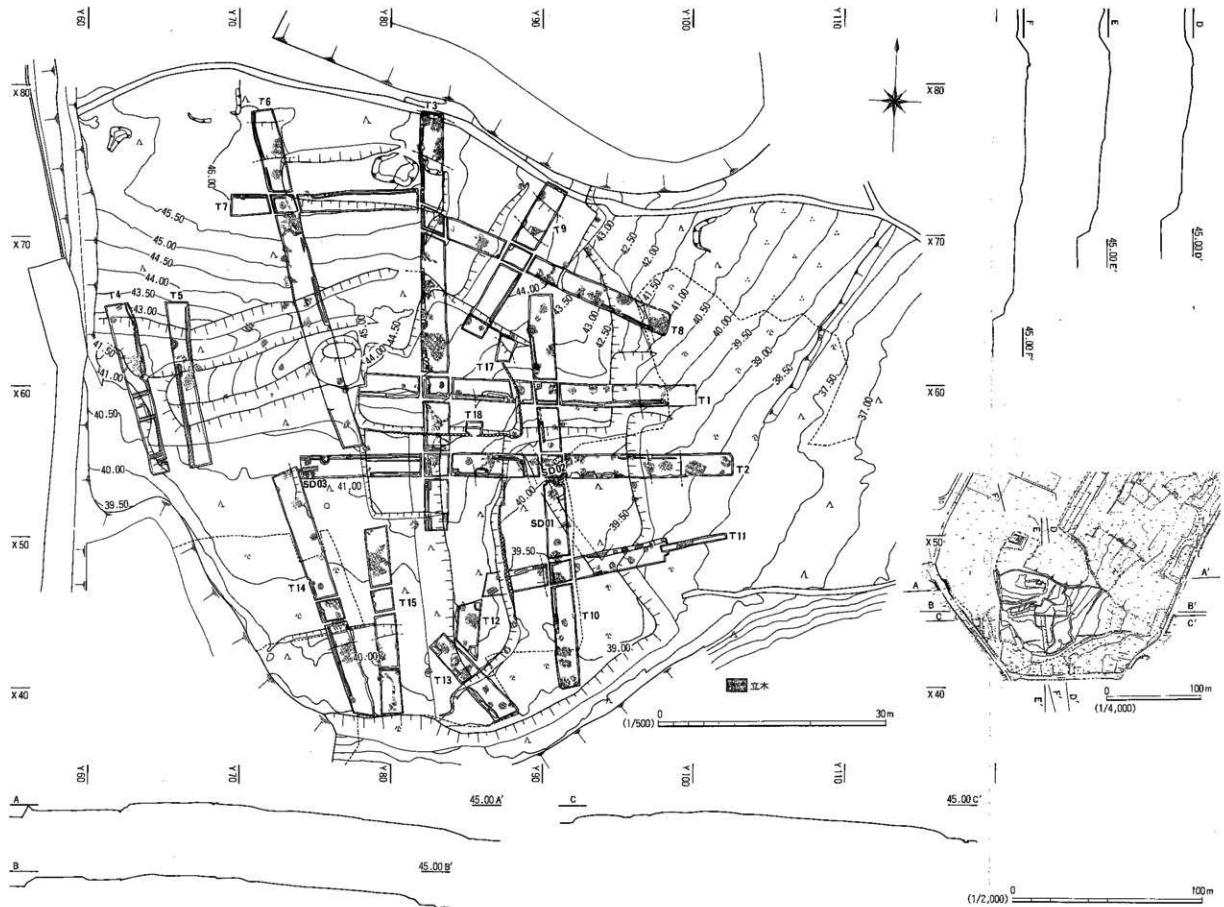
堀・土塁は、現況の平坦面の下層に検出された。堀は二重に巡らされている。内堀は北東隅で直角に近いかたちで曲がっている。その幅は6m前後で、地山面からの深さは100~190cmを測る。内堀の南側・西側に盛られた土塁の高さは、地山面から30~100cmを測る。内堀で囲まれる面積は、堀部分を含めると東西50m・南北60mで約3,000m<sup>2</sup>を測る。また、土塁内側の平坦面のみでは、東西35m・南北43mで約1,100m<sup>2</sup>となる。一方、外堀の幅は5m前後で、深さは内堀と比べると60~160cmと浅めである。土塁はほとんど確認できないが、北側で50~70cmの盛土が確認される。外堀で囲まれる部分は南北83m・東西80mで、約5,000m<sup>2</sup>を測る。2つの堀には時期差がある可能性もあるが、試掘トレンチ内での層序からは確認できなかった。

現況で確認される平坦面は、堀を大量の土砂を使って埋めた上に造られている。地山面から地表面までの高低差は、深いところでは100~120cm（堀を埋めた所では160~180cm）を測る。平坦面の多くは南北に軸を描えており、一部では積み石も施されている。平坦面は7面以上確認されるが、そのうち軸の方向の異なる2面は後世の畠などの区画と考えられる。

以下、各地区ごとに述べる。

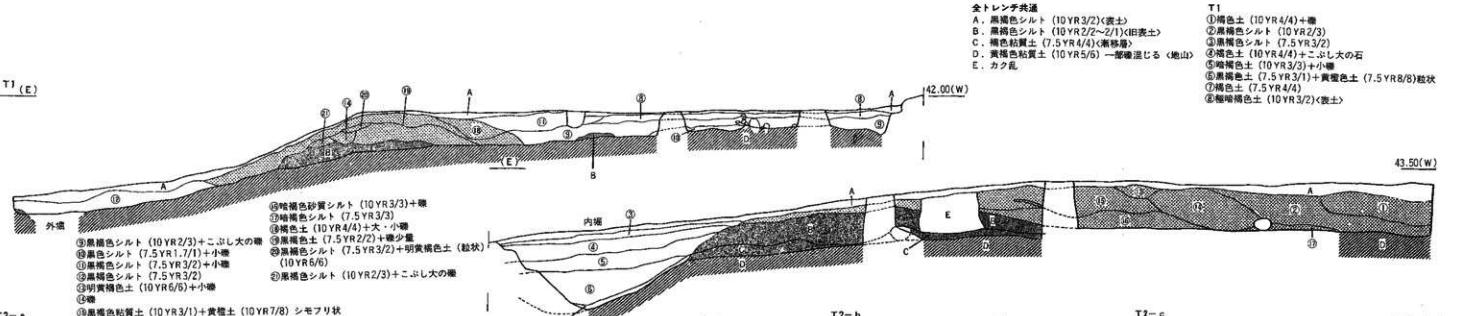


第4図 地区割図 (1/1,000)

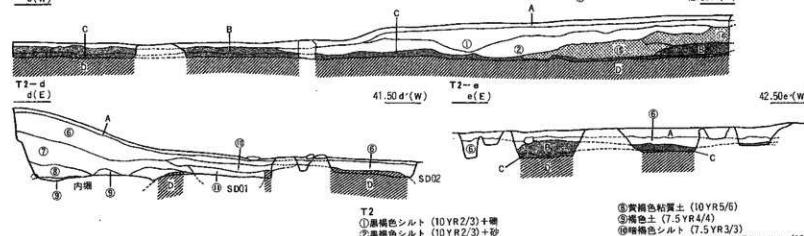


第5図 平面図 (1/500) 及び横断・縦断面図 (1/2,000)

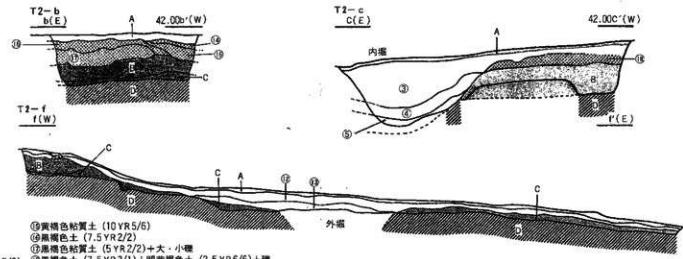
T1 (E)



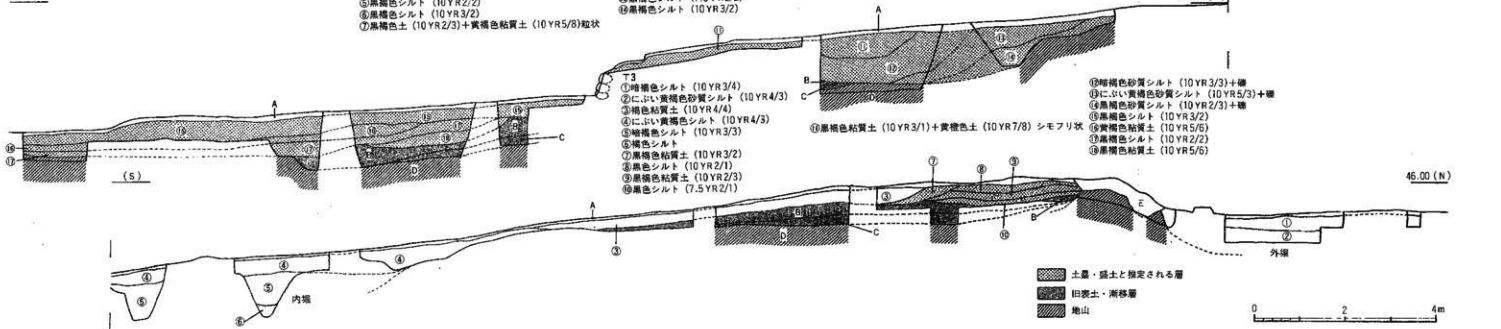
T2-a (W)



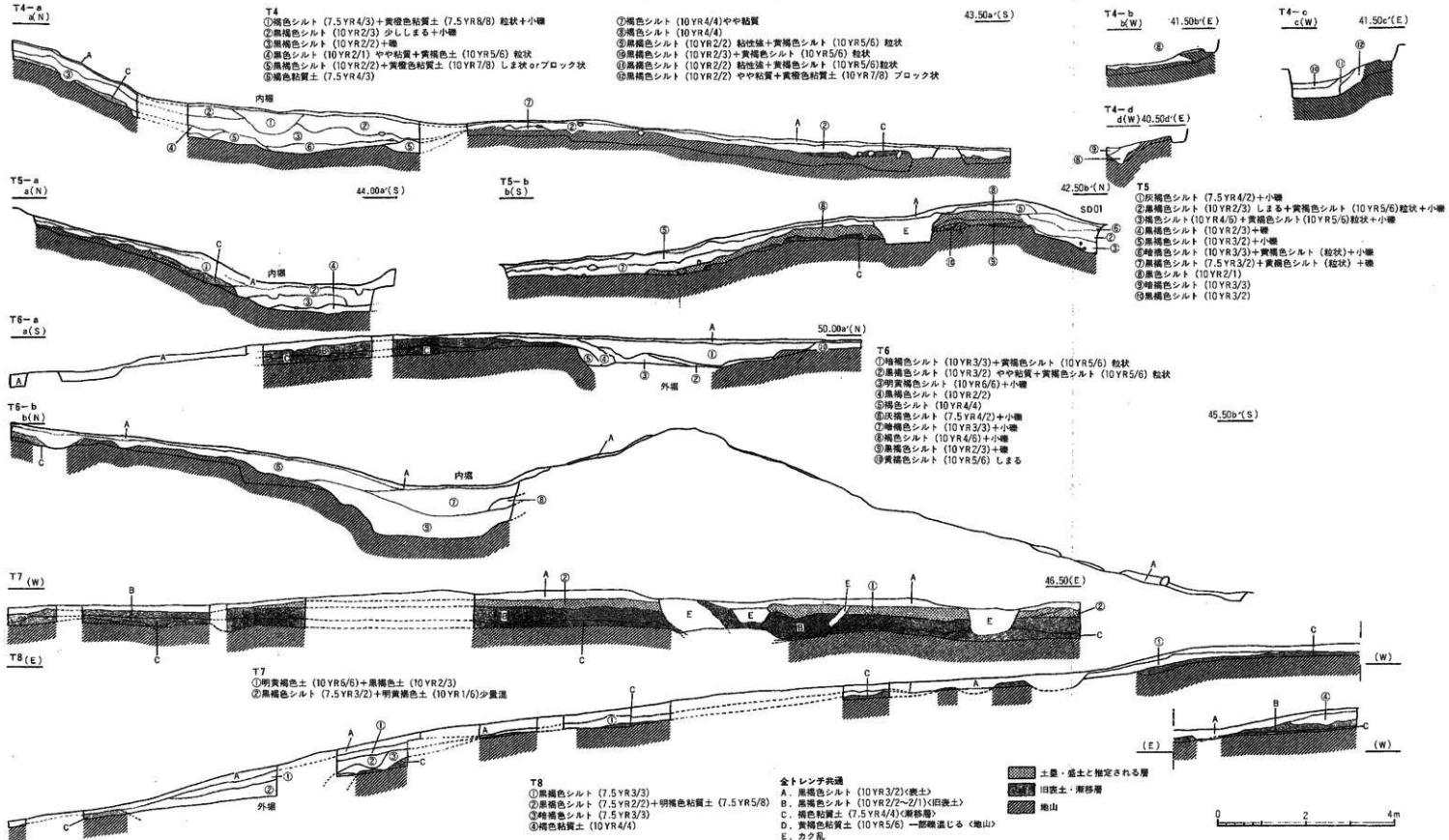
T2-b (E)



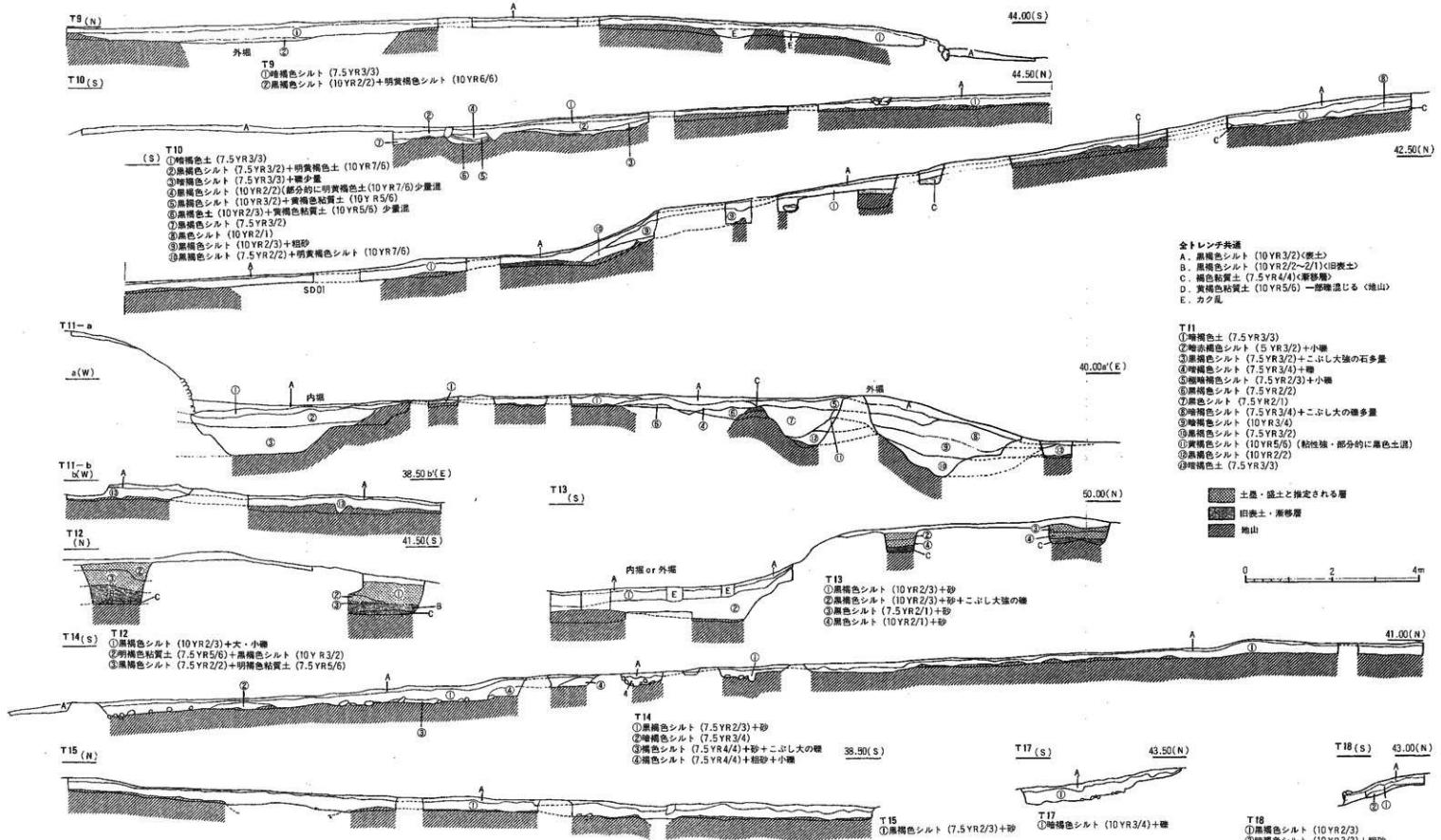
T2-c (E)



第8図 土層断面図 T1 ~ T3 (1/80)



第7図 土層断面図 T 4 ~ T 8, (1/80)



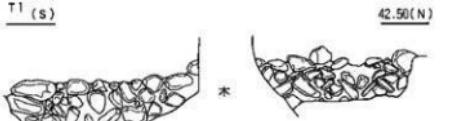
第8図 土層断面図 T 9～T 18 (1/80)

A地区は南北17m・東西21mの平坦面である。標高は42.00~44.00mを測る。B・C・J地区との境に石積みが確認された。B地区境の石積みは5段前後で、高さは60cmである。18トレンチ部分は、当初石積みが確認されなかつた為この平坦面への入り口部分と考えていたが、調査の結果、當時あった石積みが後世に崩されていたことが分かった。C地区境の石積みは4段前後、高さは50cmで、北側が北西方向に曲がる。J地区境の石積みは3段前後で、高さは40cmである。この石積みはI地区境までは続かず、I地区境では段差もだらかになる為、ここがA地区的入り口と考えられる。東・北側では下層に内堀が確認された。南北方向から東西方向へと曲がるコーナー部分にあたるものと考えられる。堀の上層に造られた平坦面は、内堀掘削時に出た土砂の他にも多量の土砂を使って造成されたと考えられる。盛土の厚さは当地区が最も厚く、100~120cmを測る。

B地区は南北10m・東西19mの平坦面である。標高は41.00~42.00mである。下層には、B地区とD地区にまたがり内堀が確認される。B地区とD地区には高低差があまりなく、境が区別しづらい。盛土の厚さは50~90cmを測る。

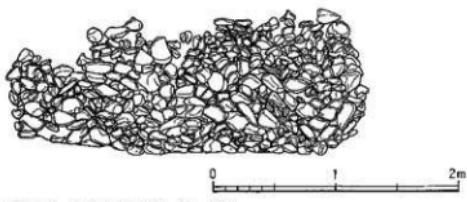
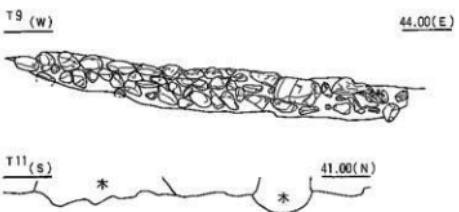
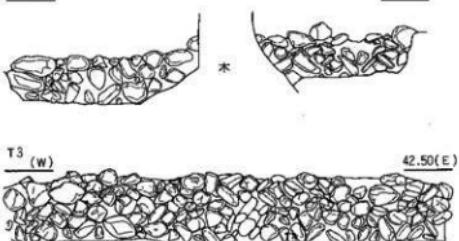
C地区は南北11~24m・東西12mの平坦面である。標高は41.20~43.50mである。北側から南側へと緩やかな下り斜面になっており、その高低差は2.2mある。東側の下層には土器の盛上がり認められ、平坦面はその高さに合わせて土を盛ってつくられている。盛土の厚さは、南側は40~70cmを測るが、北側は10~30cmと浅い。

D地区は南北28~37m・東西17mの平坦面である。標高は39.00~40.50mである。方向のやや異なる二つの平坦面が合わさっているようだが、境が明確でなく、時



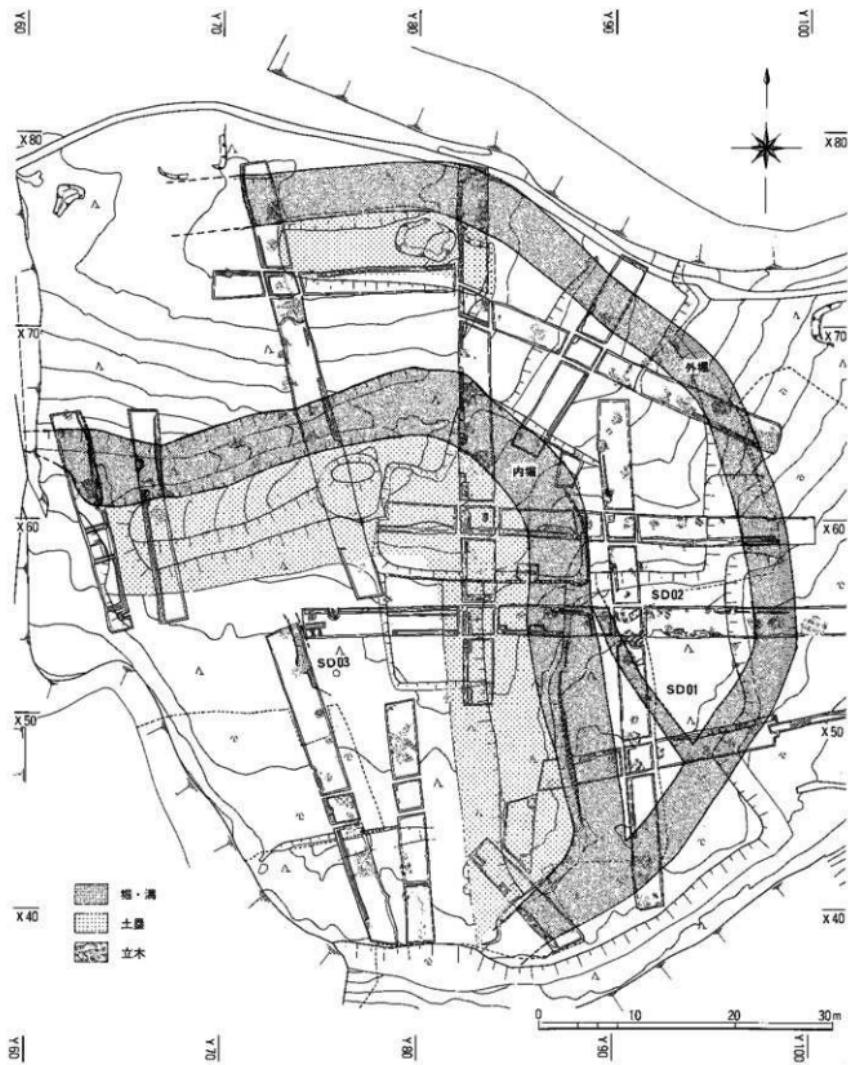
期的な差があるのかどうかなどは明確でない。当地区では、西側に内堀が確認された。内堀は南北方向にのびており、E地区までまたがっている。東側中央部のくびれ部分では外堀を確認した。外堀の西壁際には別の掘り込みが観察でき、後世の溝が重なっている可能性がある。当地区の南側で内堀と外堀が交わる可能性があるが、都合上10トレンチの外堀の状態を確認できなかった為、断定はできない。中央部にはSD01がある。北西から南東方向にのびており、幅は140cmを測る。北側にはSD02がある。幅は60cmでSD01とほぼ直交する。当地区では盛土はほとんど無く、地山面までの深さは10~20cmと浅い。西端では内堀を埋めた後、B地区境の南側とE地区境に石積みが施されている。他地区的ものより高く積まれており、上部はだいぶ崩れているが、残りの良い場所では120cm(15段前後)を測る。石の大きさや形は不揃いだが、石が安定するように法面に傾斜をつけている。

E地区は土器部分と推定される場所にあたり、東西幅11mを測る。標高は40.00~41.50mである。内堀から掘り上げられた疊・砂混じりの土が30~70cm盛られている。



第9図 石積み立面図 (1/40)

F 地区は標高は43.00~46.50mである。中央部東側に、東西にやや高めの平らな面がのびている。この場所には30~50cmの盛土が確認され、土壌部分と推定される。北側は一段低くなっている外堀が巡っている。南側は緩やかな下り斜面がG地区まで続いている。



G地区は北側に内堀、南側に土塁がある。標高は40.50～45.50mを測る。かなり埋められてはいるが、当地区では他の地区より堀・土塁の地形が残っており、堀は丘陵に上がる道として利用されていた。A地区と接する場所では土塁の上に礫を集中して積んでおり、詳細は分からぬが、後世になにか別の目的のものに再利用された可能性がある。

H地区は内堀と土塁に囲まれた平坦面で、南北40m・東西15～36mを測る。標高は39.50～41.50mである。盛土はほとんど無く、地山面までの深さは15～30cm程度と浅めである。14トレンチ北側にはS D03がある。幅は約1mを測り、内堀と方向を同じくする。南から3分の1付近で低い段があり、南側が少し低くなるが、植林による後世の地形かもしれない。

I・J地区は後世の畑の区画である。I地区が南北20m・東西7mで、標高が44.50～45.00m、J地区が南北20m・東西9mで、標高が43.60～44.30mを測る。両地区ともに盛土はほとんど無く、地山面までの深さは20cm程度と浅い。J地区北側には外堀が巡る。また、畑に使っていた肥え溜めと思われる、漆喰で固められた円形の石組みが、外堀を切って検出された。

K地区は、標高が38.00～43.00mと調査区中最も低く、外堀が南北方向にのびている。盛土はほとんど無く、地山面までの深さは20cm程度と浅い。

なお、どの平坦面にも建物跡は確認されなかった。

#### 4 遺物

出土した遺物には縄文土器、弥生土器、須恵器、古代土師器、珠洲焼、中世土師器、瓦器、瀬戸美濃焼がある。ほとんどは中世の盛土中から出土している。以下、各時代ごとに述べる。

##### ①縄文時代の遺物

49～54は縄文土器である。49は縄文時代中期前葉の新保式II期（加藤1986）に比定できる。器形は円筒形の胴部にキャリバー形の口縁がつく。文様は、口縁上端に爪形文を押し並べ、口縁部には縄文地に半載竹管で曲直線を描いており、胴部には木目状撚糸文を施文してある。50・54は深鉢の底部である。51・53は深鉢胴部で木目状撚糸文を施す。そのうち51は胴部上端に爪形文が押し並べられている半隆起線文等をもつ。I地区8トレンチと地区トレンチで出土した。52は深鉢の口縁部で、LRの縄文を横位に施す。49はI地区で、50・51・53・54はD地区で、52はF地区で出土した。

##### ②弥生時代の遺物

55・56は弥生土器である。55は器台で、受部に外反する複合口縁をもつ。口縁部に径2cmの円形の浮紋を2箇所以上に貼り付ける。内面はヘラミガキ、外面は口縁部はハケ目でその他は横ナデする。56は壺で、頸部と体部の境の突帯にキザミ目を付ける。内面は磨滅しており調整は不明だが、外面は横ナデしている。時期は昨年度と同じ弥生時代末のものと思われる。どちらもA地区で出土した。

##### ③古代の遺物

57は須恵器で、杯の底部である。底径は13cmを測る。H地区で出土した。

58は古代土師器である。ロクロ成形の碗である。底部は柱状高台になっており、底面にヘラで削った跡がある。底径は4cmを測る。F地区で出土した。

##### ④中世の遺物

1～48は中世土師器である。中世土師器は今回の調査で最も多く出土した遺物である。成形方法や口縁部の形態から、12タイプに分類した。うち、ロクロ成形は少なく3タイプのみで、残り9タイプは非ロクロ成形である。なお、出土地点については、実測図の注記を参照されたい。

### ロクロ成形（Aタイプ）

A 1 (43) 底部が厚く高台風になっている。

器形は浅く、口縁部は緩く内湾する。口径は8cm、底径は3cmを測る。

A 2 (44・45・47・48) 底部は厚めで径が大きい。底径は5cmのものと、7~8cmのものがある。

A 3 (2・18・46) 体部が直線的に立ち上がる。器壁は薄い。口径は7cm、9cmを測る。46は内面底部全面にタールが付着している。

### 非ロクロ成形（Bタイプ）

B 1 (27・31) 口縁部に2段ナデを施し、端部は外傾するように面取りする。口径は13cm、14cmを測る。

B 2 (32・38・40・41) 口縁部に2段ナデ

第11図 中世土器分類図（1/3）

を施し、上段のナデ部分を外反させる。口径は14cm、15cm、16cmを測る。40は内面を木口ハケで調整する。

B 3 (25・26・30) 口縁部に一段ナデを施し、端部は外傾するように面取りする。30は内面を木口ハケで調整する。口径は12cm、13cmを測る。

B 4 (12・19・21・22・23・33・34・35・36・37・42) 口縁部に一段ナデを施す。体部は直線的あるいは緩く内湾し、口縁部は上方に屈曲して立ち上がる。19・35・36は内面を木口ハケで調整する。口径は9cm、10cm、11cm、14cm、15cm、16cmで、10cmと14・15cmのものが多い。

B 5 (5・6・7・8・9・11・20・28・29) 口縁部に幅が狭めの一段ナデを施す。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部はつまみ出すようになる。11・28は内面を木口ハケで調整する。口径は8cm、9cm、10cm、13cmで、8cmものが最も多い。

B 6 (1・3・10・13・14・16) 口縁部に一段ナデを施す。器形は浅く、体部が緩く立ち上がる。器壁はやや薄めである。口径は7cmと9cmで、9cmのものが多い。

B 7 (15) 口縁部に一段ナデを施す。平底で、器形は浅く、口縁部が強く屈曲して立ち上がる。器壁は薄い。口径は9cmを測る。

B 8 (4・24) 口縁部は内湾し端部が尖る。器壁は薄く、胎土は緻密である。口径は7cm、11cmを測る。

B 9 (17・39) 口縁部は直線的で端部が尖る。器壁は薄く、胎土は緻密である。口径は9cm、15cmを測る。

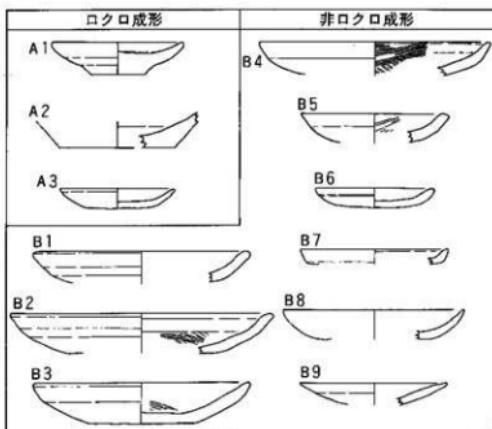
59~61は珠洲焼の甕である。59・60は胴部破片で、59は叩き目が細かく、60は粗い。61は口縁部破片で、珠洲Ⅲ期に比定できる。珠洲焼の出土数は少なく、図示した3破片のみである。全てA地区で出土した。

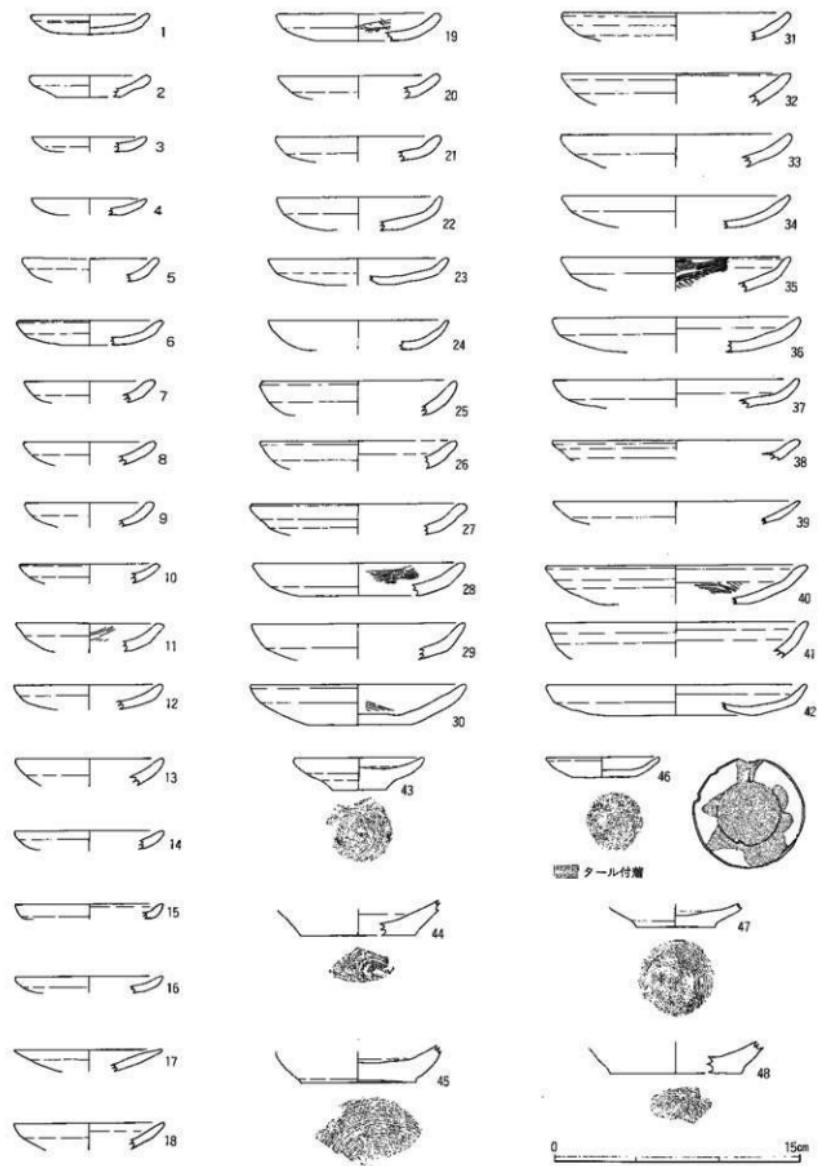
62は瓦器で、小型の火鉢の底部である。器壁が薄く、底径は20cmを測る。体部は緩やかに立ち上がり、外面に放射状の珠文を魚子状に配してある。在地産のものである。K地区で出土した。

63は瀬戸美濃焼の小皿である。口径は11cmで、緑灰色の釉がかかる。D地区で出土した。

### ⑤その他

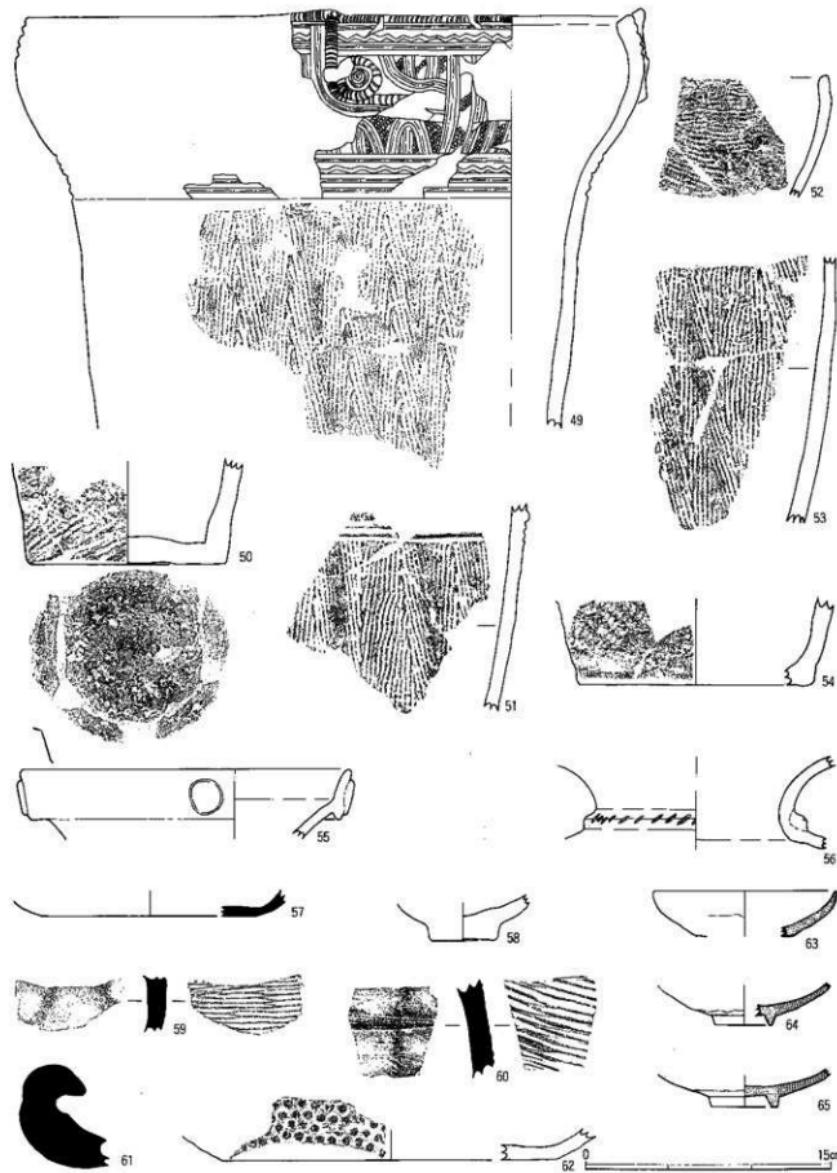
64・65は伊万里焼の小皿である。見込の釉を蛇の目状に剥ぎ取っており、高台は径3.5~4cmと非常に小さい。64は染め付け小皿でJ地区出土、65は青磁小皿でF地区出土である。どちらも18世紀のものである。





第12図 遺物実測図 (1 / 3)

A地区：1・5・6・11・12・15・16・17・19・26・27・28・31・34・35・36・40・42・43・44・46  
 B地区：2・4・7・8・10・13・14・20・29・38・39, D地区：22・24・32, E地区：45・48  
 F地区：18・30・47, J地区：3・33・37・41, K地区：9・21・23・25



第13図 遺物実測図 (1/3)

A地区：55・56・59・60・61, D地区：50・51・53・54・63, F地区：49・52・58・65, H地区：57  
J地区：64, K地区：62

## V まとめ

### 1 平成7年度調査結果について

今回調査した中世城館の存続期間は、2つの時期を中心とするものと考え得る。時代の古いものから順にⅠ期、Ⅱ期とし、各時期の様相を推定すると、まずⅠ期には、丘地区を中心として、内側の堀・土塁に囲まれる平坦面が造られる。北側・東側の堀・土塁は直角に近いかたちで曲がるため、平坦面は四角いものであったと思われる。内部の空間は、現存する範囲で測ると約1,100m<sup>2</sup>と狭く、単郭であったと考えられる。ただし、内部空間が狭いことについては、丘陵の西側と南側における削平の影響もかなり受けている。また、西側の防御施設は不明だが、南側は川が自然の防御施設となっていたのだろう。

次にⅡ期は、Ⅰ期の構造が大規模に改造される。まず、内側の堀・土塁が埋められる。そして更にその上に盛土を施すなどして、幾つかの新たな平坦面が造成されている。盛土・埋土に要する土砂はかなりの量に及んでおり、当時の土木技術からするとかなりの大事業であったことが予測される。土砂は館北側に続く尾根部分から削られてきたと推定され、丘陵南半分は地山面までの深さが非常に浅い。盛土はA地区、B地区の順に厚く、遺物もこの順で多く出土することから、この2つの地区が中核となる平坦面となり得よう。Ⅱ期は、Ⅰ期の城館が整備されたとも考えられるが、西側ではⅠ期の内堀をしっかり埋めていないことや、平坦面を単に段状に形成するという単純な構造をとっていることなど、防御性があまり強く感じられない点が気にかかる。こういった点を重く考えた場合、城館以外の別の用途に使われた可能性も否定し得ないだろう。西側・南側が削平を受けており、全体の構造が判然としないことも、性格を考える上での判断材料を少なくしている。外側の堀・土塁については、Ⅱ期に存在した可能性も否定出来ないが、層序からは確定出来ず不明である。

今年度調査の問題点として、柱穴等の建物跡が確認されなかったことが挙げられる。平坦面上には何らかの建物が存在したと予測されるのだが、下層面については、盛土下の状況を確認したサブトレンチが時間の制約でかなり狭くなってしまったことが大きな原因だろう。

遺物に関しては、中世のものがほとんどを占める。中世土師器については、ほとんどのタイプにおいてA地区的出土数が多く占めているが、B6・B8・B9といった新しめのタイプはA地区と同様もしくはそれよりも多くB地区で出土している。ただし、試掘調査における出土数には限りがあるため、この傾向は今後の調査によって変動し得る。これまでの県内および町内での土師器編年の研究成果を参考として、本遺跡の中世土師器の年代を考えると、ロクロ成形のA1・A2タイプと非ロクロ成形のB1・B2・B3・B4・B5タイプは12世紀中頃～13世紀前半、ロクロ成形のA3タイプと非ロクロ成形のB6・B7・B8・B9は14世紀前半～15世紀前半と推定される。中世の出土遺物の用途別組成をみると、貯蔵用具・調理具はほとんどなく、食器もしくは灯明皿である土師器の比率が圧倒的に多い。土師器を儀式用の容器と考えると、この城館の持つ性格は、城館のうちでもより政治的色合いが強いものと考えられる。ただし、県内で調査された同時期の城館の遺物の組成と比較すると、土師器が100%近くを占める例は見受けられない。性格の違いによるものと推定されるが、詳しくは今後の調査例の増加を待って判断すべきであろう。それに対して、丘陵南裾部の分布調査採集遺物の用途別組成では、貯蔵用具・調理具が多くを占めている。日常容器の割合が多いことから、この地区には居住空間としての性格が窺われる。この地区の中世の遺物は、おもに13世紀後半から15世紀のものと考えられる。なお、現在までに研究がなされている富山県の中世土師器の編年は、県西部の出土土器を参考にしたもののが中心となっているが、姫中町は県東部に位置しており、これらとは若干形態が異なる可能性もあるが、今回はこれについての詳しい分析はおこなっておらず、今後の課題とせねばなるまい。よって、城館の存続期間はこれまでの研究成果を参考にしたものであるため、上記のような中世土師器編年の地域差を考えると

するなら、その年代には若干のずれが生ずる可能性もある。

以上より検討すると、今回の調査地区は、Ⅰ期・Ⅱ期ともに政治的色彩の濃い空間であり、自然地形による防御機能が備わった丘陵を選定して築かれたものと考え得る。ここには遺物・遺構の両面からみて、日常の居住の痕跡が極めて薄く、臨時の場合に使われた空間である可能性もあり得よう。一方、丘陵南裾部は館を取り巻くように形成された日常的な居住空間と想定できる。時期的には、出土遺物より、Ⅰ期は12世紀中頃から13世紀前半、Ⅱ期は14世紀前半から15世紀前半と推定される。丘陵南裾部の居住空間は、遺物の年代から考えてⅡ期より形成されたものと考えられる。

参考までに、町内の城館の発掘調査例には、友坂遺跡（12～15世紀）や国指定史跡の安田城跡（15～16世紀）がある。友坂遺跡は、周溝を巡らせた方形の区画内に建物跡や土坑が配置されており、居館的性格を持つものとして捉えられている。また、安田城は、多郭式の平城で、土塁を廻らす本丸と二の丸、右郭で構成され、周りの堀には井田川から水を取り込んでいたと推定されている。県内で発掘されたその他の城館には、寺家新屋敷跡、梅原胡摩堂遺跡、白鳥城跡などがあり、北陸中世土器研究会（1991）によって、これまでに発掘された城館出土の陶磁器の様相が時期別にまとめられている。

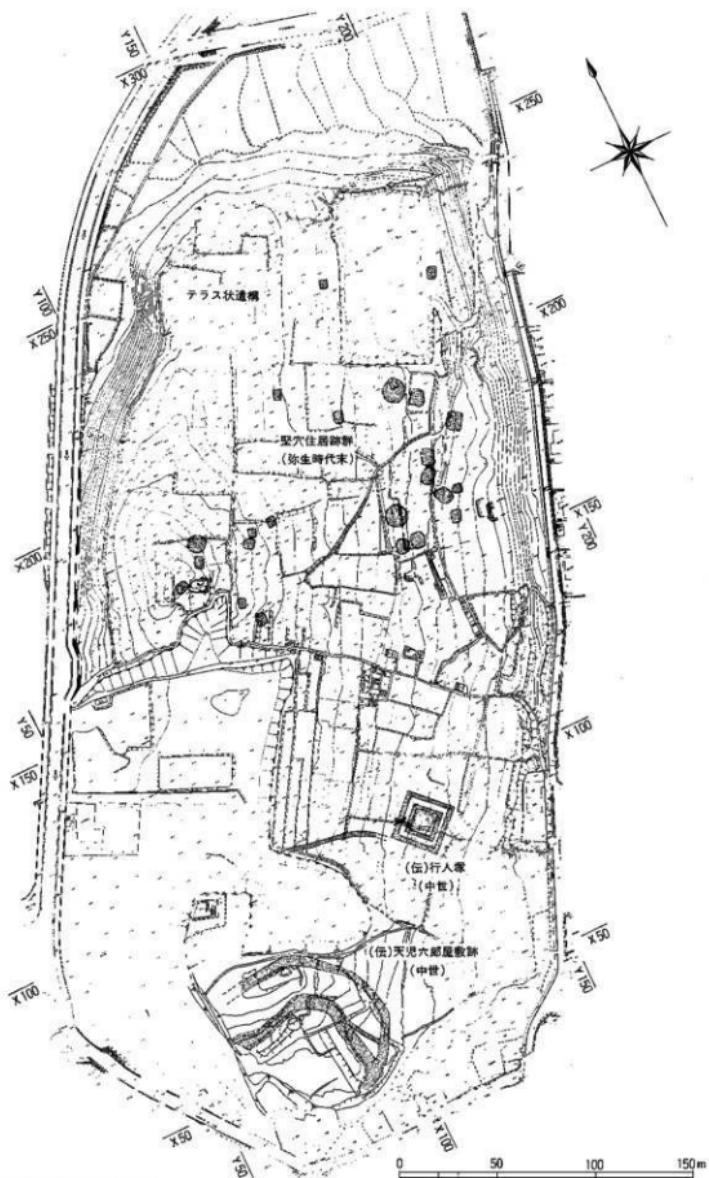
## 2 千坊山遺跡について

これまでの調査により本遺跡の位置する丘陵が多時期・多岐にわたり利用されていたことが分かった。そのおもな概要をまとめると、①旧石器から中世にいたる遺物が採集される複合遺跡である、②弥生時代末の堅穴住居跡が25棟確認された、③特殊な形態の中世の塚状遺構（13世紀後半～14世紀前半）が確認された、④堀・土塁を廻らす中世の城館跡（12世紀中頃～13世紀前半、14世紀前半～15世紀前半）が確認されたなどである。

そのうち、③④の中世の遺構に関しては、それらを取り巻いていた時代的な背景として、守護や寺院の存在がある。まず、遺跡周辺には砺波平野から八尾方面に抜ける旧道が通っており、婦負郡の守護支配の中心となる場所であったとされている。また、守護と並んで民衆を支配する力があったとされるのが寺院であるが、この周辺にも当時いくつかの寺院が存在していたとされている。そのうちの一つである各願寺は、遺跡の北東250mの位置にあり、現在も再建されたものが存在している。伝承によると、当寺は大宝元年（701年）に創建された後、伝教大師の教えにより法相宗から天台宗に改めた。ここには幾千坊もの末寺が建ち並び、隆盛をきわめたといわれる。なお、本遺跡の位置する丘陵の北半分の小字には全て「千坊（千保）」がつくが、これは前述のことによ来するという説もある。各願寺は、建武二年（1335年）に越中の守護普門俊清と同院定清の戦いで兵火により失われたが、大永三年（1523年）に玄弘僧都に再建され、真言宗に改宗して現在に至るといわれる。また、遺跡南西の蓮華寺地内には、臨済宗の蓮華寺が存在していたと推定されており、昭和56年度の発掘調査では掘立柱建物や石列などの遺構が確認されている（鍋中町1984）。その他には、所在地など詳細は不明であるが、明徳二年（1391年）書改「西大寺諸國末寺帳」に記載されている長沢弘正院があり、越中所在の西大寺四室末律宗寺院の一つとされている（久保1996）。以上のことから、この地は守護・寺院の両勢力が存し栄えた重要な地であり、城館や特殊な塚を造るべく環境が揃っていたといえよう。なお、古代から発展してきたこの一帯は、続く戦国時代には神保氏の拠点の一つといわれる富崎城星群を形成する地にも選ばれている。

## 結 び

2年間にわたる試掘調査の結果多くのことが判明したが、その反面解明されるべき点も依然として多く残されている。千坊山遺跡における今までの調査は試掘調査にとどまり、調査にある程度の限界性があったことは否めない。それに加え、今回の調査では時間の制約や立木の問題によってトレンチの掘削方法が十分なものではなく、調査の成果



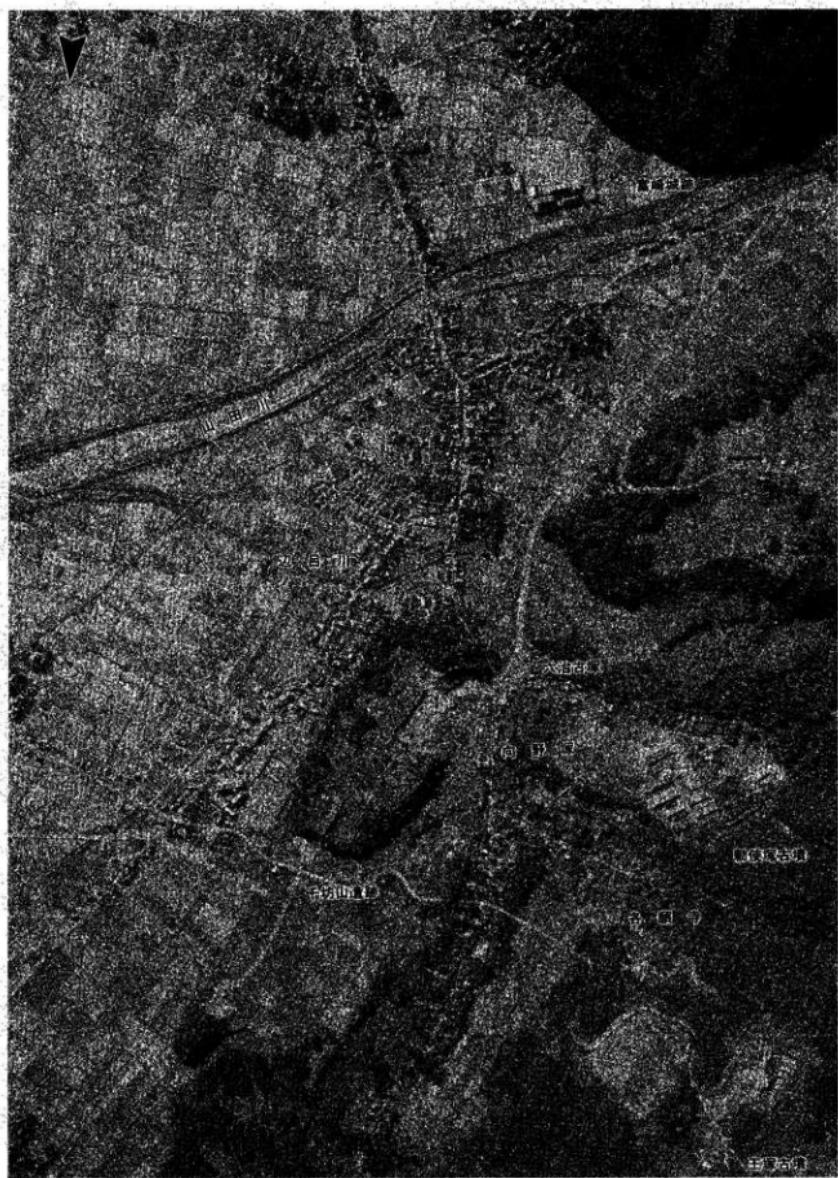
第14図 千坊山遺跡概要図 (1/2,500)

が中途半端なものになってしまった感があり、反省している。

本遺跡では、一つの小さな丘陵がいろんな時代の資料の宝庫となっているため、将来効果的に活用できるものと考えている。また、環境的に周辺に多くの重要な文化財が存在することから、それらを一体化した活用方法も期待できよう。こういった将来の文化財活用の面から考えても、千坊山遺跡自体の更に詳細な調査に合わせ、現段階では十分でない周辺遺跡の調査・検討により、当遺跡の実態を把握していく必要性を痛感している。

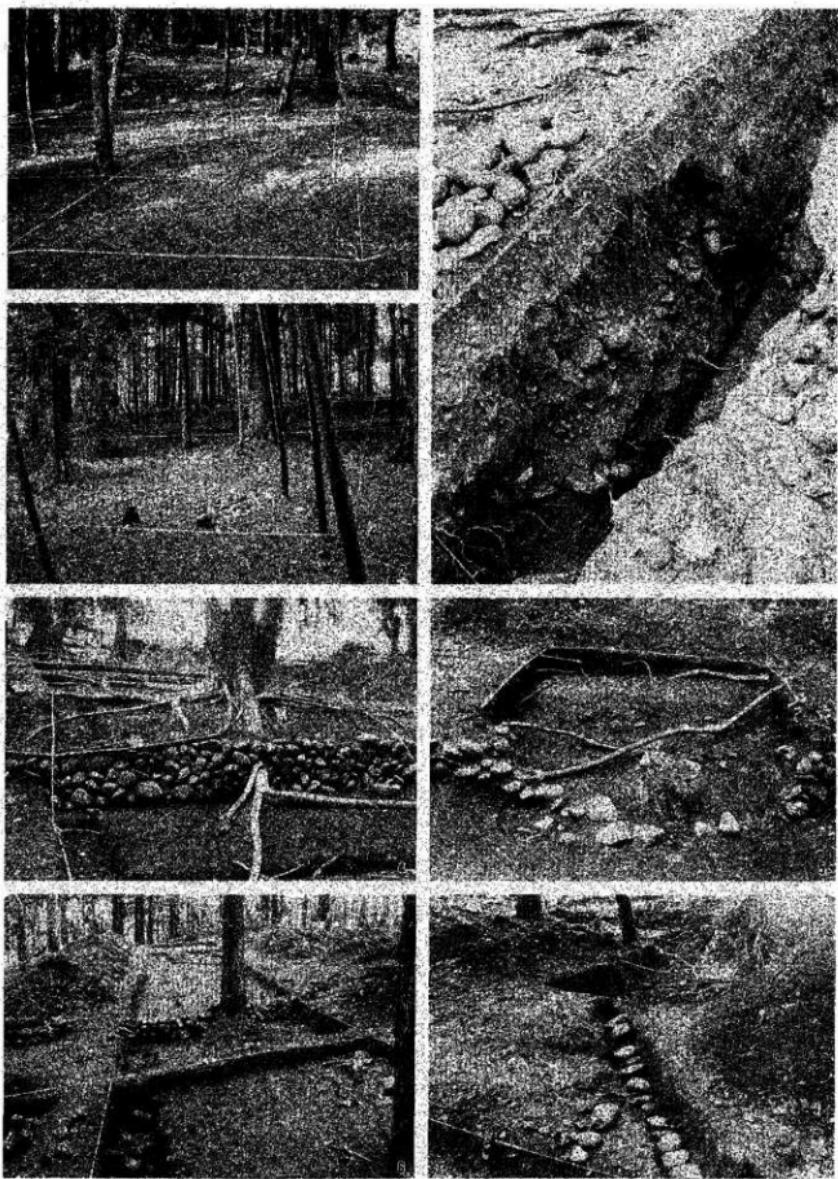
### 参考文献

- ク 久保尚文 1991『越中における中世信仰史の展開（増補）』  
サ 佐伯哲也 1991「富崎城墨群の変遷」『大境』第13号  
セ 千田嘉博・小島道裕・前川要 1993『城館ハンドブック』  
タ 高瀬保 1993「一絵図のバリエーションー「長沢諸事集覽之図」について」「解説図録古絵図は跡るー立山・イマージとそのカタチ」立山博物館  
ト 富山県埋蔵文化財センター 1993『富山県埋蔵文化財包藏地図』  
ニ 西井徹儀・藤田富士夫 1976「具羽山丘陵周辺の先土器・縄文時代草創期の遺跡について」『大境』第6号  
ノ 都能町教育委員会・真庭遺跡発掘調査団 1986「石川県能都町真庭遺跡」  
ホ 北陸中世土器研究会 1992「中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器」  
北陸中世土器研究会 1991「城館遺跡出土の土器・陶磁器」  
フ 姪中町 1967・1996『姪中町史』  
姪中町教育委員会 1995『千坊山遺跡(1)』  
姪中町教育委員会 1995『富山県姪中町名II 遺跡発掘調査報告』  
姪中町教育委員会 1993『富山県姪中町小倉中郷遺跡発掘調査報告(2)』  
姪中町教育委員会 1984『蓮花寺遺跡の調査－富山県姪中町蓮花寺所在の中世遺構調査報告－』  
姪中町教育委員会・姪中町婦人ボランティア講座 1992『姪中町歴史のあしあと』  
姪中町教育委員会・姪中町婦人ボランティア講座 1994『ふるさと－郷土の歴史と文化・再発見－』  
ヘ 凡人社 1988『古伊万里』別冊太陽63号  
ヨ 吉岡康暢 1989『珠洲の名陶』珠洲焼資料館

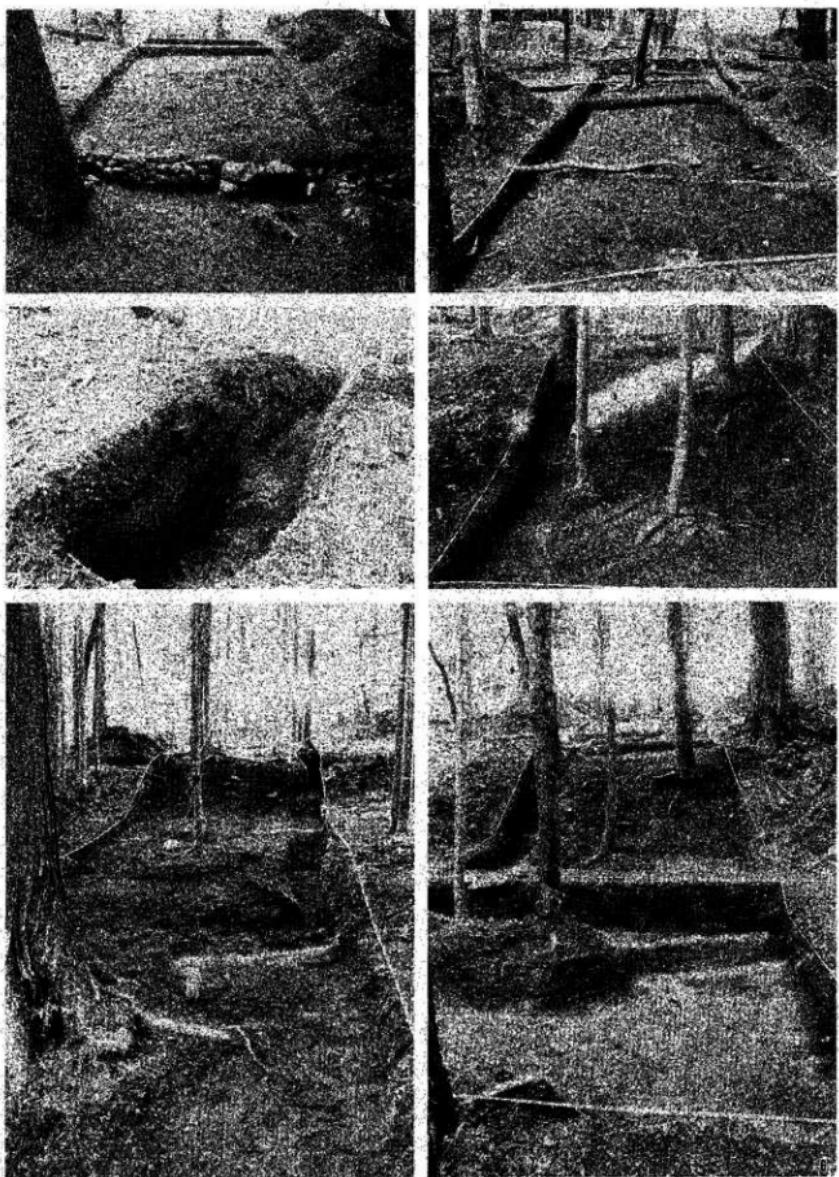


図版1 周辺の航空写真

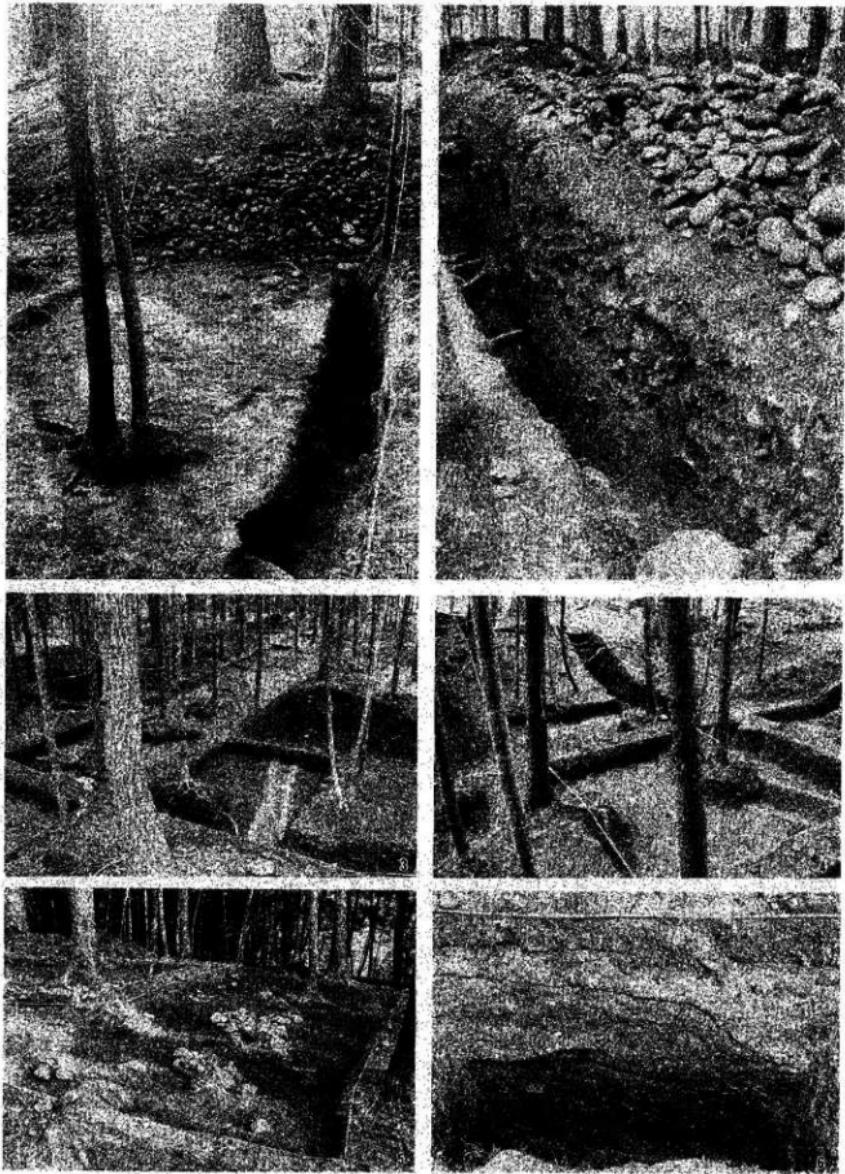
国土地理院 昭和50年9月撮影



図版2 1. B地区T3掘削前状況 2. K地区T2掘削前状況(東から) 3. A地区T1盛土状況  
4. A・B地区T3石積み状況(南から) 5. A・B地区T18(南から) 6. A・C地区T1(東から)  
7. A地区東側石積み検出状況(南から)



図版3 1. A・J地区T9石積み状況(南から) 2. B地区T3(南から) 3. D・K地区T2盛土状況  
4. C・D地区T10(南から) 5. D・K地区T2外堀検出状況(東から) 6. C・D地区T10(南から)



図版4 1. D・E地区T11石積みと内堀検出状況(東から) 2. D・E地区T13盛土状況

3. D地区T10内堀・溝検出状況(北から) 4. D地区T2(南東から) 5. E地区T13

6. E地区T12層位



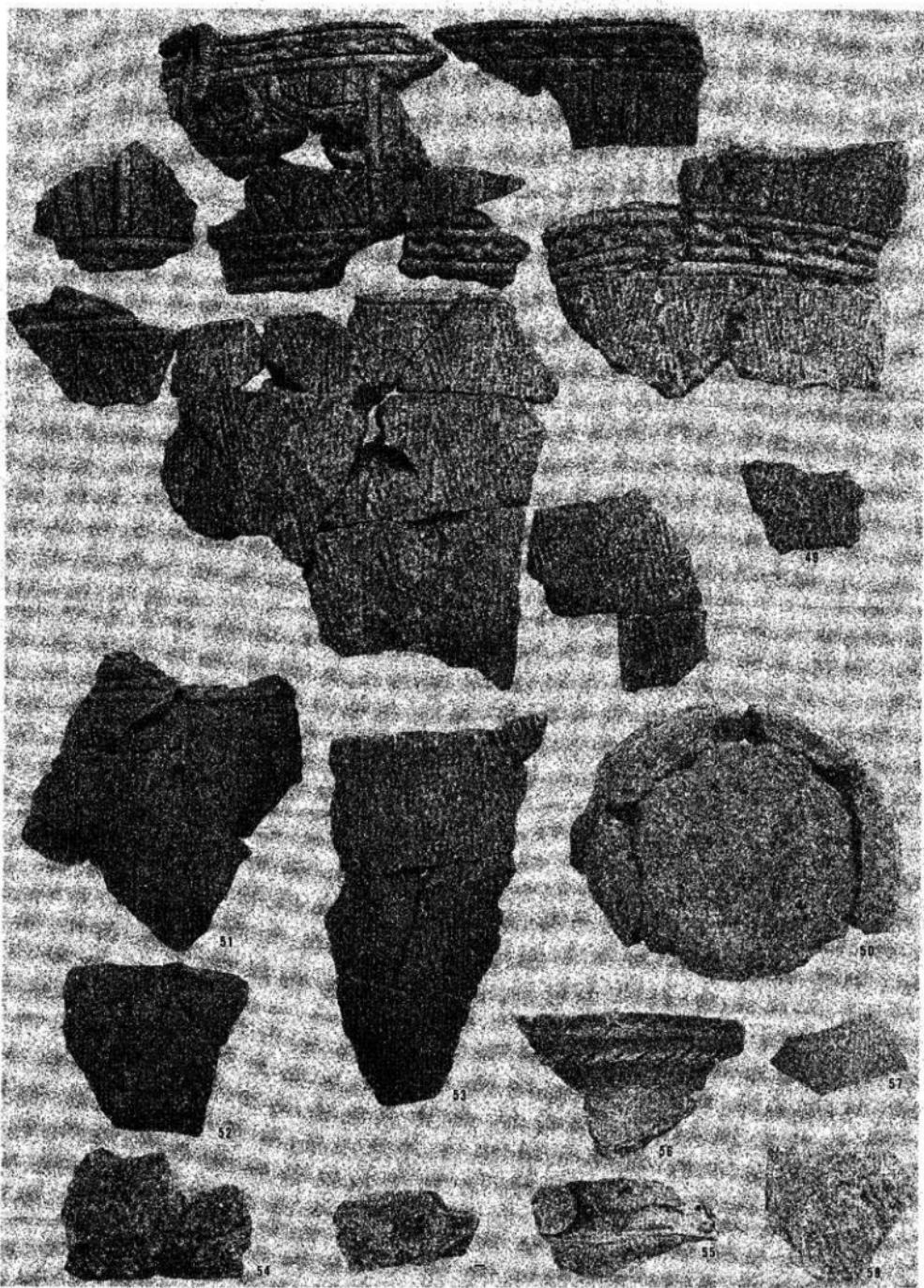
図版5 1. F地区T3外堀検出状況(北西から) 2. F地区T6外堀検出状況(北から) 3. F地区T7(東から)  
4. G地区T4内堀検出状況(北西から) 5. G地区T5内堀検出状況(北西から)  
6. G地区T5内堀埋土層位 7. G地区T5(南から) 8. G地区T6内堀検出状況と礫集中地点(北から)



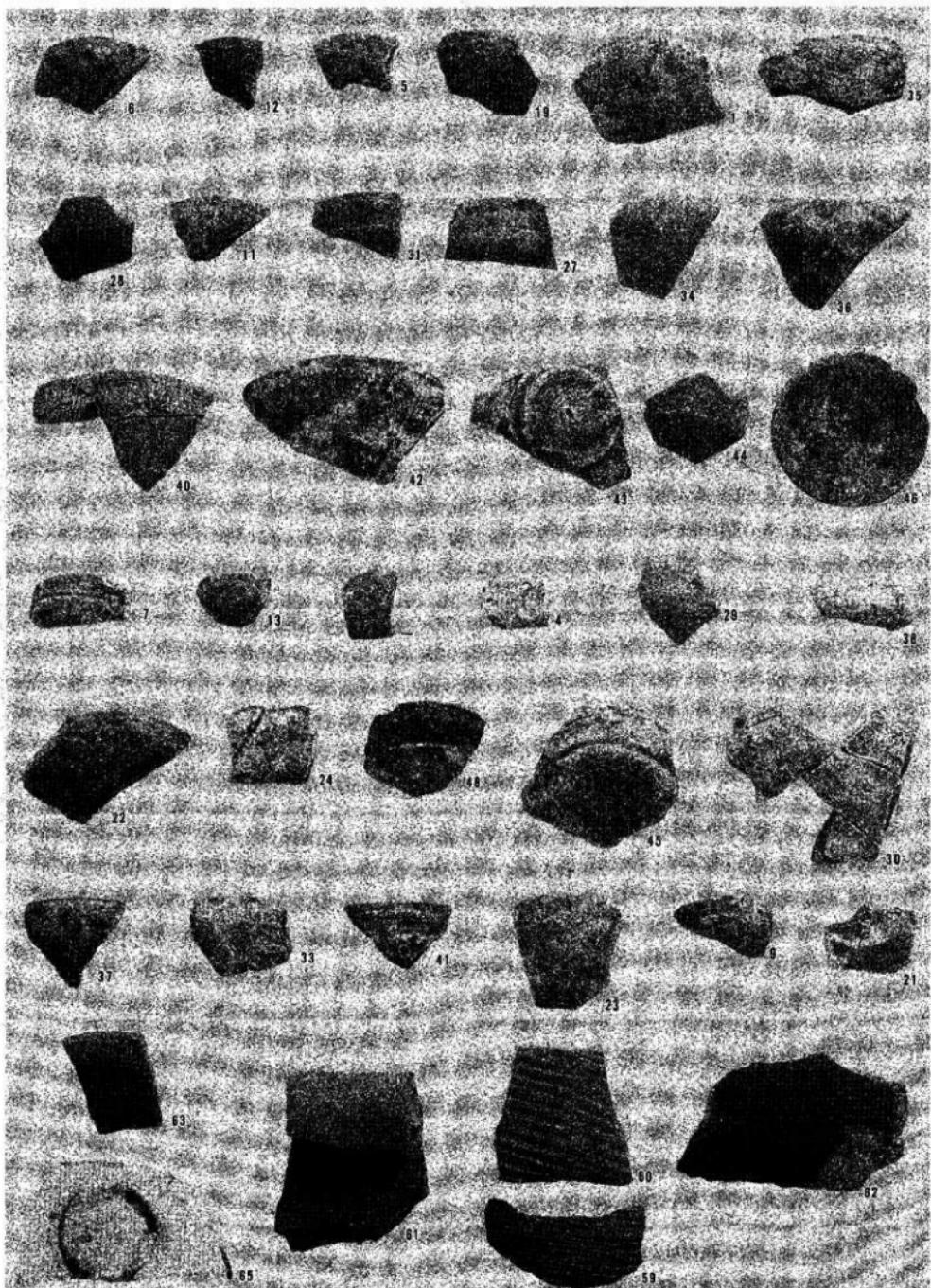
図版6 1. H地区T14(北から) 2. H地区T14(南から) 3. H地区T15(北から)

4. I・J地区T8(西から) 5. J地区T9外堀検出状況(北東から)

6. C・K地区T1(東から) 7. C・K地区T1盛土層位 8. 作業風景



図版7 出土遺物 種番号は実測番号



図版8 出土遺物 番号は実測番号

## 報告書抄録

ふりがな	せんぼうやまいせき							
書名	千坊山遺跡(2)							
シリーズ名	埋蔵文化財緊急調査事業に係る埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	(2)							
編集者名	片岡英子							
編集機関	婦中町教育委員会							
所在地	〒939-27 富山県婦負郡婦中町速星754 TEL (0764) 65-2111							
発行機関	婦中町教育委員会							
所在地	〒939-27 富山県婦負郡婦中町速星754 TEL (0764) 65-2111							
発行年月日	西暦 1996年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (対象) m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号	° °'	° °'			
千坊山遺跡	富山県婦負郡 婦中町長沢字 天王6146番地 外	016362	029	36° 39' 06"	137° 07' 39"	961001～ 961126	対象面積 7,000 発掘面積 1,420	埋蔵文化財 緊急調査事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
千坊山遺跡	館跡	中世	堀 土器 溝	織文土器、弥生土器 中世土器、珠洲焼 瓦器、近世高麗器				

平成8年3月29日発行

### 千坊山遺跡(2)

編集 婦中町教育委員会  
 発行 婦中町教育委員会  
 富山県婦負郡婦中町速星754  
 印刷 日興印刷株式会社